



①

● 今では、とても考えられないですが、太平洋戦争中には、戦争に不利だからという理由で、政府によって、台風や地震や津波のことまでが秘密にされ、天気予報を国民に知らせることも、一切禁止されました。

● これは、その当時、新聞でもラジオでも知らされなかった大津波のお話です。

● 和歌山県に新庄という小さな村がありました。

● 昭和十九年、十二月七日、午後一時三十六分のことでした。突然、家の壁が落ち、地割れするほどの大きな地震が起こりました。



②

● 国民学校（現在の小学校）の三年生のまさる君の家は、お母さんとまさる君の二人暮しでした。お父さんは、まさる君が一年生のとき、戦死したのです。

● お父さんが軍隊にいつてから、お母さんは町の工場で働くようになりましたが、お昼は、いつもかけ足で家に帰ってきて、午前中だけで授業が終わって家に帰るまさる君と一緒に食事するようにしていました。お昼ごはんを食べると、お母さんはまた、かけ足で工場にゆくので、「お弁当を持っていけば……」と、まさる君は言うのですが、「そうしたら、お前一人で食べなきゃいけないだろう」といって、毎日かけ足を繰り返しているのです。



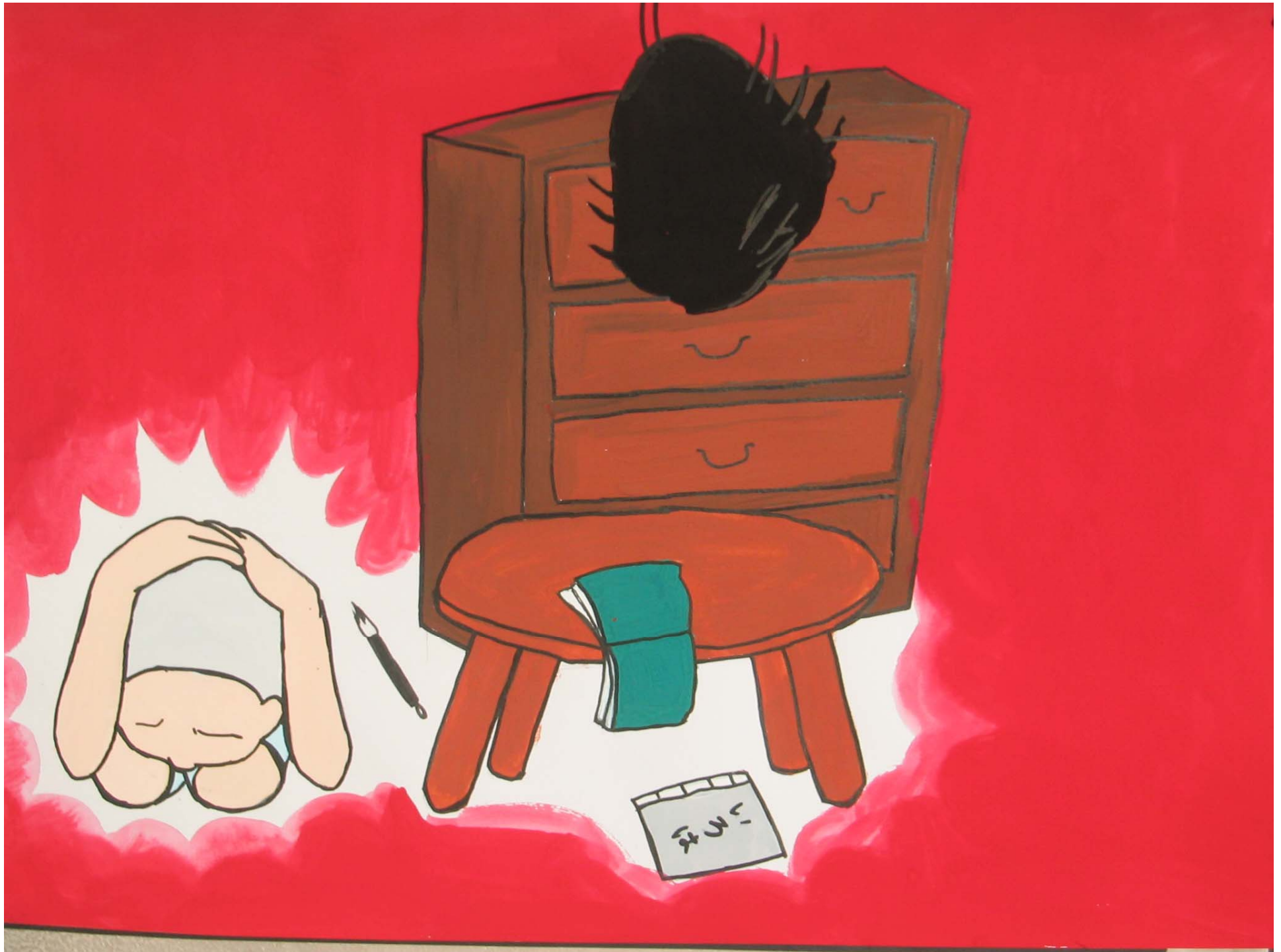
③

「ただいま」

今日も、まさる君が帰ってくると、お母さんが、お膳に二人分の食事をならべて食べるばかりにしています。戦争中のことですから、食事といっても、お皿の上にお芋が三つと、漬物に味噌汁だけです。その頃は、お米が足りなくて、お芋がご飯がわりだったのです。

「食べたらお皿とお碗を洗って、宿題をやって、それから遊ぶんだよ。夕方になったら、井戸から水を汲んでおいてね。」

お母さんは、口をもぐもぐさせて、お芋の残りを食べながら、まさる君にそう話すと、また、工場に出掛けました。



④

今にも家がつぶれそうな大きな地震がきたのは、まさる君がお膳を片付けて、教科書を広げたばかりのことでした。

メリメリツと音を立てながら家が大きく揺れ、棚のものや壁が、ドスン、ガチャンと落ちてきます。屋根の瓦も落ちているようです。危ない！と思っても、なかなか立つことが出来ず、まさる君は、二回も三回も転んでしまいました。

少しおちついて縁側から外に出ると、あっちの家からも、こっちの家からもみんなが飛び出しており、辺りは大騒ぎになっていました。半分かたむいている家もあります。

「まーちゃん、怖かったろう。もう地震はだいじょうぶだろうが、こんなときは津波があるもんだっていうから、海岸に遊びにいったやいけないよ。」

と、隣のおばちゃんが、まさる君に注意してくれました。



⑤

お父さんが、よくおじいさんに聞いた昔の津波の話をして、「海岸であそんでいても、地震があつたら、すぐ家に帰るように」と、口やかましく言っていました。だから、おばちゃんの話すことが、よくわかりました。

「はい」と、返事をして入ってみると、中は、もう、めちやくちゃで、片付けようにも、まさる君一人ではどうにもなりませんし、まだ胸がドキドキしていて、勉強にもなりません。

これから、どうしよう？と考えているときでした。表のほうで、誰かが、大声で叫んでいるのが聞こえます。

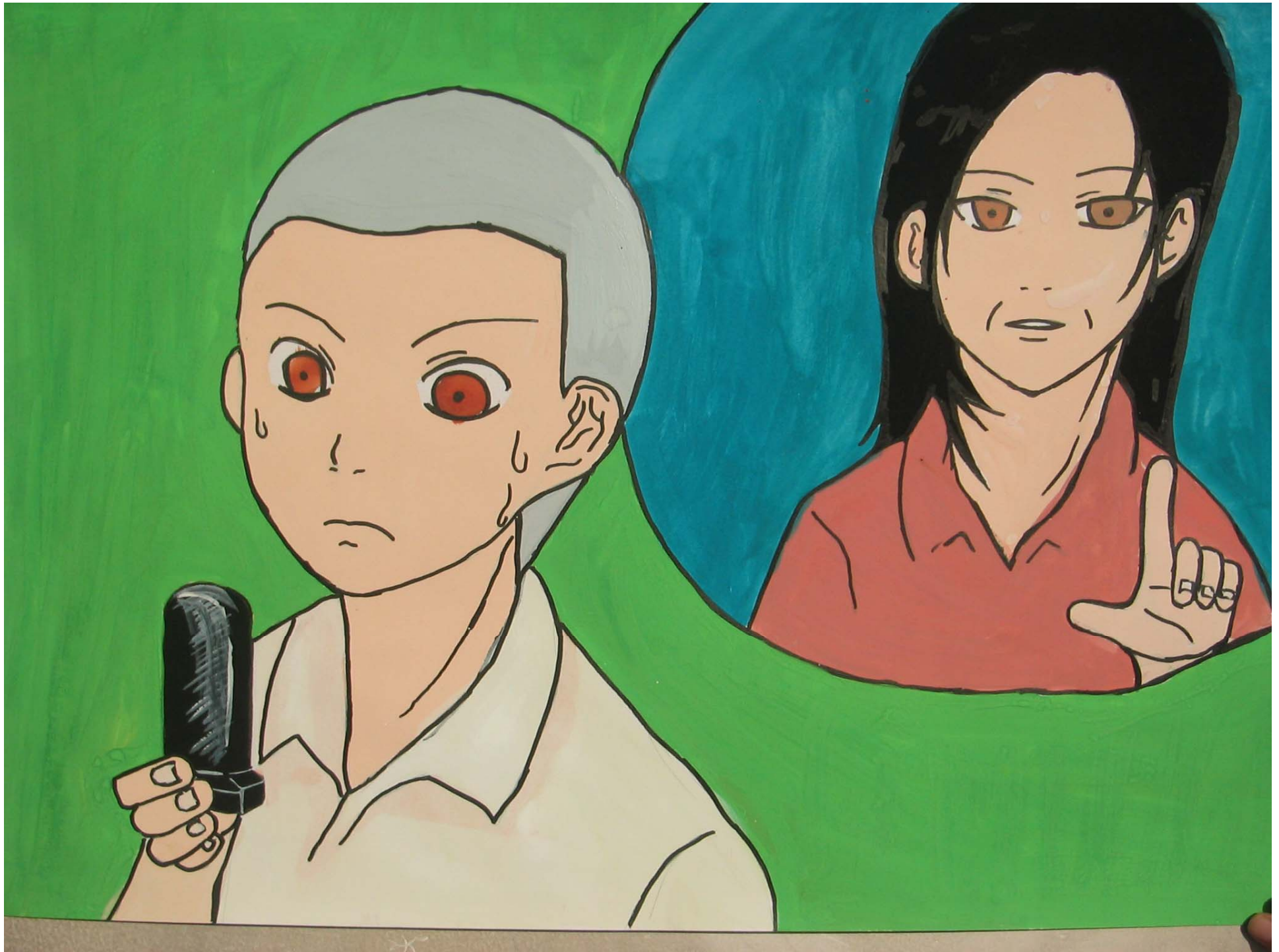
なんだろう？と、耳をすますと、

「津波だー！津波がくるー……」

と、みんなに知らせているのです。

はっとしましたが、たつた今、おばちゃんから津波の話聞いたばかりだったので、すぐ、教科書をカバンにしまい、肩に背負って、お母さんの工場のほうへかけだしました。

お母さんはまだ知らないでいるかもしれない、早く教えて一緒に逃げようと、思ったからです。



⑥

少し走ってから、まさる君は、大切なものを忘れたことに気づきました。戦死したお父さんの位牌です。空襲警報が鳴って防空壕に非難するとき、いつも仏壇からお父さんの位牌を出していただいていたのは、まさる君の役目でした。そして、「お位牌は、お父さんの身代わりなんだよ。こうすれば、きつとお父さんが、まさるとお母さんを守ってくれる」と、お母さんから、何度もその意味を聞かされているのでした。それを思い出しながらまさる君が、家に引き返そうとすると、途中、小走りに逃げている、隣のおばちゃんに会いました。

「あら、まーちゃん。なにか、忘れ物？」

「うん。お母さんと一緒に、ぼくもすぐ行くよ……」

そのとき、隣のおばちゃんは思いました。

（あれ？あの子のお母さんは工場から帰ってきてなすったのだろうか？）

おばちゃんは、ちよつと変に思いましたが、走っていくまさる君の後姿を見送って、また走り出しました。それがまさる君と話をし、元気な姿を見た最後になるとは、おばちゃんは、そのとき思ってもみませんでした。



⑦

● その頃、お母さんも、まさる君が心配だったので、急いで家に戻り、「まさるー」と、声をかけたのですが、返事がないので、もう逃げたものと思い、そのまま丸山に走っていたのでした。

● 後ろでは、ゴゴオーツと、ものすごい音をたてながら、すでに津波が押し寄せていました。

● お母さんは不安を覚えつつも、急いで避難場所に行きました。そこには、まさる君がいると思っただけです。



⑧

山の上は、避難の人たちで、ごったがえしていました。

お母さんは、「まさるー まさるー」と叫びながら、まさる君を探しましたが、いくら探してもまさる君は見つかりません。そのうちに、お母さんは、隣のおばちゃん、ばったり会いました。

「おばちゃん、うちのまさるを見なかった？」

「あら、あんた、会わなかったの？」

「えっ!」

おばちゃんの話聞いて、お母さんは、真っ青になりました。

近くの人たちも、一緒にまさる君を探しましたが、やっぱり、どこにも見当たりません。

もしかしたら学校へ逃げたのかもしれないと、お母さんは学校に走りましたが、そこにもいませんでした。



●
●
⑨

●
夕方、死体になっている、まさる君が消防の人たちによって発見されました。お母さんが行ってみると、まさる君はカバンをせおったまま、津波で壊された、どこかの家の、壁と壁の間にはさまって死んでいました。カバンの中には、教科書とともに、布に包んだお父さんの位牌がしまわれていました。

●
まさる君は、あのまままっすぐに山に走ればよかったのですが、家にお父さんの位牌を取りに戻り、その上、お母さんを心配して工場にまわったために、逃げ遅れて、津波においつかれてしまったのでした。



10

＊ ＊ ― あ と が き ― ＊ ＊

「こうして新庄の村では、約七〇〇戸が流されたり、壊されたりし、約一七〇〇戸が水にひたっていました。死んだ人は三十八人とも九十六人とも書かれていて、正確な数が、今でもはつきりしません。すべてが秘密にされたために、そのとき、よく調べることができなかったからです。死んだ人のうち、十七人がまさる君のように戦死した人の遺族だった、との調べもあります。」